

大学発アーバンイノベーション神戸 研究成果報告書

令和5年5月26日

申請区分		一般助成型	課題番号	A20106
研究課題名		「病」と「厄災」をめぐる比較都市史的研究: 感染症対策と公衆衛生言説を中心に		
研究期間		令和２年～令和４年度		
研究代表者	氏名	佐々木祐		
	大学等	国立大学法人神戸大学		
交付決定額(研究期間全体)		2,358,000 円		

○研究成果の概要（400字以内）

新型コロナウイルス流行下の県内の学校に関する調査に基づく分析と、明治・大正期の新聞に掲載された感染症に関する記事の分析及び現代のコロナ禍における報道・情報流通との比較などを行なった。

神戸市の港湾開発を通じた労働者を取り巻く景観や社会関係の変化や、アスベスト被害などを含む「港湾病」の労働災害認定をめぐる労働者の運動に注目して、神戸港における労働の歴史と「病」の関係を明らかにした。

日本華僑社会への感染症の影響に関する歴史と現在を分析した。また、中国での新型コロナウイルスに対する取り組みや、近代東アジアにおける帝国主義的拡大とコレラなどの感染症の流行との関係について海外からの研究者を招いて議論した。

神戸を舞台にした文学作品を読解・分析する作業を通じ、神戸の表象の背後には、戦争や災害、排除や病といった事象が存在していることを明らかにし、またそれが都市にさらなる深みや陰影を与えていることを示した。

○研究成果の学術的意義や社会的意義（200字以内）

我々が直面してきたコロナ禍による生活や社会の変化を、神戸という土地に軸足を置きながら、歴史的な文脈において捉える作業、より広い「病」の構築過程から分析する作業、また国際的な比較・分析を通じてその意味をより立体的に描き出す作業を進めた。こうした成果はシンポジウムおよび報告書、論部などで社会に還元した。

1. 研究開始当初の背景

海港都市・神戸の歴史的・社会的編成は、外部から到来する人・モノだけでなく、様々な病や災害との交渉によっても彩られている。本研究では、そうした経験がどのように想起され記述されたか、またどのように継承され現在に息づいているのかを、さまざま報道・記録資料、そしてオーラルヒストリー資料の収集・分析を組み合わせ、この地に根ざした記憶に人文学的な光を当てることを目的とする。神戸新聞や外国人支援団体との緊密な連携によって進められる本研究の成果は、その都度広く公開され、さらなる資料や経験の発掘・収集と分析へとつながる。開港以降数度にわたる戦争や疫病、そして震災とコロナ禍を経験した港町神戸に蓄積された知恵の数々は、より良き未来の生のための貴重な資産となるだろう。

2. 研究の目的

具体的に取り上げるのは、結核やコロナウイルスといった「はやり病」と、神戸を襲った戦災・水害・地震・公害といった「厄災」の記憶と言説である。まず資料館や地域に保存されている歴史資料（手記やミニコミ類も含む）の収集・分析を行い、病と厄災が公共的イメージとして形成されていった社会的プロセスを明らかにする。さらにそれぞれの「場所」をめぐる記憶や人々の経験を、フィールドワーク調査によって掘り起こし収集することにより、文字には残されていない空間的・口述的な歴史の存在に光をあてる。その際、外国人住民や移動労働者の経験にも注目しながら調査を進める。こうした二層からなる調査データをもとに、海外の研究者との議論も行いつつ、病と厄災をめぐる比較都市史的視座を提示することを目的とする。

3. 研究の方法

安保規夫『ミナト神戸 コレラ・ペスト・スラム』（1989）の先駆的な研究にも示されている通り、海港都市神戸の形成は防疫と公衆衛生の観点に強く規定されてきた。またそれは、外国人や移住労働者をはじめとする多様な人々の生活管理にも大きく関わっている。また、震災や昨今のコロナ禍においても明らかになったように、そうした人々は病や厄災においてより大きな危険や不安に晒される対象でもある。この観点を踏まえ、本研究はまず以下の二層からなるプロジェクトに基づいて進行する。

I. 記録に残された病と厄災

まず、世界に広く開かれた港町神戸における伝染病と厄災に関する社会史的資料（行政資料、防疫関連資料、新聞・雑誌記事、手記、ミニコミ等）を集中的に収集・分析する。明治期のペスト、大正期のコレラ・スペイン風邪に始まり、昭和期における様々な感染症やエイズ、そして現在の新型コロナウイルスに対する社会的な対応や公共イメージの形成が主たるテーマとなる。また、戦争や震災・公害といった社会的変動のもとで、そうした病がどのようにクローズアップされ、どのように人々を襲ったのかについても注目する。各大学図書館・神戸文書館や神戸華僑歴史博物館・賀川記念館等に収蔵されている史料・資料、また和田岬・神戸検疫所や国立療養所関連の文献、さらにはよりコミュニティレベルの地域史料をも分析対象とする。

II. 記憶と空間の中の病と厄災

同時に、病と厄災が地域の人々にどのように記憶され語り継がれ、そして想起されているのかについての聞き取り・フィールドワークを実施する。そうして蓄積された記憶・イメージや、非常事態において形成された相互扶助の経験が、たとえば現在のコロナ禍においてどのように機能しているのか、またその課題や限界はどこにあるのかについて明らかにすることが主たる目的となる。さらに、都市としての神戸の形成・再編過程において不可視化されようとしながらも確かに残り続ける土地と空間の記憶にも光をあてる。また、いくつかの組織・団体との連携により、外国人住民や移住労働者の経験に迫ることも大きな目標となる。

4. 研究成果

【雑誌論文】

佐々木祐他、「2021 年度・2022 年度「社会調査演習報告書」から」、『社会学雑誌』39 号、2022 年、p.238-307

原口剛、「インフラの呪縛からの解放 ― 寄せ場の労働を再解釈する」、『大原社会問題研究所雑誌』No.760、2022 年、p.3-19

【報告会・「感染症と災禍をめぐる記憶と経験」】

川口ひとみ、「明治期伝染病における神戸華僑の衛生管理と埋葬」

金貞蘭、「Cholera epidemics in Modern Korea and Japan: The Biopolitics of Hatred」

佐々木祐、「コロナ禍における大学生の生活と学び：質問紙調査を中心に」

原口剛、「そして誰もいなくなった？：港湾における機械化と労働者の身体」

藤岡達磨、「パンデミック下の中国人住民：コロナ禍における「外国人」との争いの構造」

【図書】

佐々木祐編、神戸大学文学部・人文学研究科、『社会調査演習報告書 文学空間としての「神戸」：都市の陰影を読み解く』2023年、総169ページ

【シンポジウム】

「『病』と『厄災』をめぐる比較都市史的研究：感染症対策と公衆衛生言説を中心に」 20220326

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/event/2022-03-16-01.html>